

## 「事実の記録」から紡ぎ出す物語 ——アリス・マンローの‘Too Much Happiness’について——

福岡 恵

はじめに

今年(2013年)のノーベル文学賞授与のスピーチでも触れられていた通り、アリス・マンロー(1931-)は自身の生まれ故郷であるオンタリオ州南西部の田舎町を舞台にした作品を多く生み出している。他にも、最初の結婚で移り住んだバンクーバーやヴィクトリアといった西海岸の、あるいはトロントの都市生活を描くこともあるが、カナダの外に出ることはほとんどない。村上春樹の『恋しくて』(2013)に収録された「ジャック・ランダ・ホテル」(‘The Jack Randa Hotel’) <sup>1</sup>はオーストラリアのブリスベンを舞台にした数少ない例外だといえるが、この作品と同様 *Open Secrets* (1994) に収録されている‘The Albanian Virgin’にしても、あるいは *The View from Castle Rock* (2006) の作品などにしても、外国の舞台はカナダに何らかの形でリンクしている。

しかし、そうした「カナダとのつながり」が全くないのが、‘Too Much Happiness’ (*Too Much Happiness*, 2009) である。この作品の主人公は、ソフィア・コワレフスカヤ(1850-91)という名のロシア人数学者である。大学が女性に門戸を開いていなかった時代に、論文で学位を取得し、科学アカデミーから表彰され、ヨーロッパ北部の大学で初めて教授になった女性という経歴を持つ上に、作家でもあった。歴史に名を残した実在の人物を主人公にしたものというのも、マンローの作品の中で他に例がない。しかも、ペーパーバック版にして60頁近くに及ぶ、最長の作品である。これを書いた動機について、作者は巻末の謝辞で‘I discovered Sophia Kovalevsky while searching for something else in the Britannica one day. The combination of novelist and mathematician immediately caught my interest, and I began to read everything about her I could find.’ <sup>2</sup> と説明している。

だが、伝記が書かれるような人物の生き方に興味を持ったのは、まさかこれが初めてではないだろう。例えば、‘Bardon Bus’ (*The Moons of Jupiter*, 1982) という作品では、語り手とその友人との会話の中に、ヴィクトル・ユゴーの娘が登場する。元恋人に対する想いが断ちきれず、当時チャネル諸島で暮らしていた両親のもとを飛び出して、カナダのハリファックスへ、さらにはバルバドスへと相手を追い回し、ついには狂人として保護されたというアデル・ユゴーのことで、そのドラマチックな人生は映画にもなってい

る<sup>3</sup>。‘Bardon Bus’での「ユゴの娘」への言及は10行ほどの会話文に留められているが、このような扱いはある一方で、なぜソフィア・コワレフスカヤに限っては作品化しようと思いついたのだろうか。何が作家をそこまで引きつけたのか。そして、伝記をもとにしているにも拘わらず、‘Too Much Happiness’がマンローらしい作品に仕上がっているのはどうしてなのだろうか。

これらの疑問を解明すべく、「ノンフィクション」であるソフィアの伝記と比較しながら本作品を検証していきたい。伝記については、マンローがあれこれ読んで中で一冊だけ特別にその書名を挙げている *Little Sparrow: A Portrait of Sophia Kovalevsky* (1983) (以下 *Sparrow*) と、野上弥生子の翻訳による『ソーニャ・コヴァレフスカヤ』<sup>4</sup> (以下『ソーニャ』) を取り上げ、必要に応じてワロンツォーフ著、三橋重男訳『コワレフスカヤの生涯』<sup>5</sup> (以下『生涯』) も参照する。

## モチーフの分析

‘Too Much Happiness’は5章構成になっていて、「I」は大陸を北上する列車にソフィアが一人で乗り込むまで、「II」はパリでの途中下車まで、「III」「IV」はベルリンでの途中下車まで、そしてそれ以降が「V」、という具合に、一応は時系列で要約することができる。本作品と上述のいわゆる「ノンフィクション」3冊とを読み比べると、マンローが「原作」にかなり忠実であることがわかる。インタビューでは“‘Too Much Happiness’ is a true story about Sophia Kovalevsky. Reading her life and dramatizing it, I could find all these things ... some have changed, and some haven’t that much.”<sup>6</sup>と答えているが、作者が新たに創作して登場させたのは、列車に乗り合わせた人物くらいしか見当たらない。この与えられた「原作」の要素を、作家がいかに加工して自らの作品世界を作り上げたのか、以下いくつか抽出して分析していきたい。

### <墓地>

謝辞で‘I have limited my story to the days leading up to Sophia’s death, with flashbacks to her earlier life.’ (305) と述べている通り、‘Too Much Happiness’は主人公ソフィアと恋人マキシムがジェノバの墓地を歩いているシーンから始まる。1891年元日、墓碑銘に興味を持つマキシムの趣味で墓地を散策する羽目になったと *Sparrow* では説明されている<sup>7</sup>が、ほんの5、6行にまとめられたエピソードに過ぎない。文庫版の『ソーニャ』ではたった4行である。前者でのソフィアは‘One of us will not survive this year, because we have spent the first day in a burial ground.’ (*Sparrow* 310) という言葉を半ばつぶやくように口に

し、後者では「その時突然ソーニャの顔に暗い陰がひろがり、こんな不吉な予言をした。『二人のうちどちらかきつと今年のうちには亡くなりますよ。お正月にお墓へ来たんですもの。』」（『ソーニャ』264）。それが‘Too Much Happiness’では1頁以上を費やし、物語の開幕の重要なシーンとして据えられている。ソフィアの発言は、‘not survive’ではなく‘die’というストレートな言葉を用い、わざわざ2回も繰り返している。そして、独り言のように言うのではなくてマキシムとの会話のやりとりに膨らませている。しかも‘She speaks to him teasingly’（247）という一文を先に置いて。こうした「操作」によって、まるで舞台上のドライアイスのように、死の不吉な予感ほくもくと漂い始め、その空間に佇む主人公が、自ら迷信を持ち出しながらもそれを気の利いた冗談くらいにしか思っていないことに、読者はアイロニーを嗅ぎ取る。

墓地で墓碑を読む、という行為は、*Too Much Happiness* の前作 *The View from Castle Rock* の作品において散見されるモチーフである。序文で‘They were not memoirs but they were closer to my own life than the other stories I had written’<sup>8</sup>と断っているように、この短篇集はマンローの父方の祖先に取材したものや、両親や祖父母などが実在の姿により近い形で登場する作品から成り立っている。冒頭の作品‘No Advantages’の始めの方で、語り手は自分のルーツを訪ねてスコットランドへ渡り、教会の墓地を歩き回って先祖たち<sup>9</sup>の墓石を発見する。続く2番目の作品‘The View from Castle Rock’の最後では、語り手はカナダで眠る先祖たちの墓の前に立っている。この間に、1818年の、スコットランドからカナダへと渡る先祖たちの物語が繰り返されているのだが、語り手が墓碑を読むという行為が、彼らを墓から立ち上らせ、生き生きと行動させ、役目を終えて眠りにつかせるまでを司っているかのように読める。

このように、*The View from Castle Rock* で死者を生き返らせた「魔法」のモチーフが、‘Too Much Happiness’では主人公を死へと向かわせるという逆向きの働きをしている点が興味深い。主人公ソフィアの旅は、過去への内省であると同時に死へと向かう行路でもある。後者の意味では、旅はこの墓地から始まっているのである。

### <列車の旅>

主人公ソフィアは、恋人マキシムと過ごした休暇を終え、南仏から一人列車に乗る。ストックホルム大学の数学教授であるため、極寒の北国へ戻るのである。*Sparrow* でも『ソーニャ』でも、主人公は1頁足らずでストックホルムに到着してしまうが、マンローはこの長距離列車の旅を時間軸の枠組みに用いて、そこに主人公の回想を埋め込むことでその人生を提示している。

作家自身、列車の旅には特別な思い出があったのではないだろうか。大学に進学はしたものの、奨学金が2年間限定だったために中退し、20歳で結婚してカナダの西海岸、

ブリティッシュ・コロンビア州へと移住した。費用や幼い娘たちのことを考えると、オンタリオ州の実家においそれとは里帰りできず、その分一大イベントであったに違いない。長らくパーキンソン病を患っていた母親が亡くなったのは1959年の冬だったが、その3年前に長女を連れて帰郷したのが母との最期の別れになった。後に離婚してオンタリオ州に戻って暮らすことになるが、このはるかな距離の移動は、長距離列車の旅というモチーフでマンローの作品に時々現れる。<sup>10</sup>

最新の短篇集 *Dear Life* (2012) の冒頭の作品‘To Reach Japan’は、(日本へ行くのではなくて) 幼い娘を連れてブリティッシュ・コロンビア州からトロントへ向かう列車内の話だし、‘Save the Reaper’ (*The Love of a Good Woman*, 1998) では主人公が娘を身ごもったのはバンクーバーからトロントへの列車内でのことだと説明される。反対に‘The Spanish Lady’ (*Something I’ve Been Meaning to Tell You*, 1974) や‘Chance’ (*Runaway*, 2004) では、バンクーバー行きの長距離列車での出来事が描かれている。列車の旅は回想と結びやすく、また人との出会いの場でもある。‘Too Much Happiness’において、主人公は列車の中で若いデンマーク人の医師と知り会う。この医師については *Sparrow* にも『ソーニャ』にも『生涯』にも出て来ない。マンローの創作だと推測される。*Sparrow* では‘Because smallpox raged in Copenhagen’ (*Sparrow* 311)、『ソーニャ』では「コペンハーゲンに天然痘が流行しているのを聞いて」(『ソーニャ』265) とあるのを、マンローはこの行きずりの医師の口から語らせ、主人公にコペンハーゲンを迂回してストックホルムへ行くように仕向ける。この情報はどこまで信用に足るものだったのか。ソフィアは医師と別れた後、何度かこの疑問をぶつけるが、正しい情報だと請け合う人は誰もいない。結局、厳しい寒さの中で大迂回路をとったことが命を縮めるきっかけになったのである。そして作者は、この医師がソフィアの死亡記事を読んだことにし、‘He had thought that avoiding Copenhagen might preserve her.’ (302) としている。ここにもアイロニーが仕込まれているのである。

## 一方通行の愛

### < 姉アニュータ >

列車の旅での回想は、複雑に時間が入り組み、時に夢を交えて語られる。作品において夢は、その人物の深層心理の暴露、物語の方向性の暗示や幻想性の付与等、様々な機能を果たすものだが、ここでは時間の操作に役立っている。「II」において寝入る前のソフィアは、亡き姉アニュータの夫と息子に会いに行くというごく近い未来の計画について考えている。夢の中に現れるのは生前の、それも結婚前の若いアニュータであり、つ

まり遠い過去の出来事である。列車での眠りは浅く、夢は途切れては続く。このしかけによって、アニュータにまつわる思い出は断片化した形で提示される。

再び目覚めた後にソフィアは回想に戻るが、その回想は虚実入り混じった直前の夢と、上述した近い未来の計画とを橋渡ししている。パリ・コミューンの闘士ジャクラールにのぼせあがった姉のために、ソフィアとその夫ウラジーミルがどれだけ振り回されたかが述べられるのである。

伝記によれば、ソフィアは姉アニュータと弟フォードルとの間に生まれたのだが、両親の愛情はソフィア以外の子供たちに注がれていたという。特に母親の方はその傾向が強かったらしい。アニュータは美しくてわがままで野心家であり、成長してからも常に人目をひく存在だった。ドストエフスキーから求婚されたこともあり、『白痴』のアグラヤのモデルだとされている。そんな姉に対して、妹は常に憧れと愛着とを強く感じていたという。

‘Too Much Happiness’ではアニュータとの関係に焦点が絞られ、弟の存在は消されている。いったんパリで下車し、アニュータの夫と息子に会いに行くのは、*Sparrow* では6行あまりのエピソードであるが、‘Too Much Happiness’では6頁にわたって述べられる。ジャクラール及びその息子ユーリーとの会話は創作であるに違いない。この会話から、ジャクラールがいかに見どころのない男であるかがわかる。主人公に感情移入できている読者は、この男の救出にソフィア夫妻が尽力した甲斐があったのか疑問に思うだろう。そして、可愛がっていた甥ユーリーも彼女の記憶にあった幼い少年からはかけ離れている。ソフィアの思いは次のように表現される。

Anuita's child. And how like Anuita he was, after all. Anuita disrupting almost every family meal at Pabilino with her lofty tirades. Anuita pacing the garden paths, full of scorn for her present life and faith in her destiny that would take her into some entirely new and just and ruthless world. (264-65)

伝記とは違って、アニュータの性格描写はごくわずかなものでしかない。だがここで、自分の期待とは違った青年に成長し、過去の親密さを忘れ去っているように見える甥を描き、その甥とアニュータが似ていると表現することで、ソフィアの姉への愛情が常に一方通行であったことが暗示されるのである。

#### <母親と疑似親>

アニュータにまつわる思い出において、両親の出番は必要最低限に抑えられている。自分自身と亡き両親との関わりについては、ベルリンで下車し、恩師ヴァイエルシュト

ラスの家を訪ねる「Ⅲ」での回想に見受けられる。

この恩師訪問のエピソードも、*Sparrow* では‘In Berlin she again visited Weierstrass, because he was ill.’ (*Sparrow* 311) とたった1行、『ソーニャ』では「四五日間寄って来たベルリン」(『ソーニャ』265)と触れているだけである。『生涯』を見ても、ソフィアがヴァイエルシュトラスに会ったことしかわからない。けれども‘Too Much Happiness’では、ヴァイエルシュトラス家で一泊したことになっていて、到着してからベルリンを出発するまでに2章分を割いている。

ヴァイエルシュトラスは、ソフィアの伝記の中でも重要な存在である。「近世解析学の父」である彼のもとへ、弟子入りを希望して一人で訪ねに行く若き日のエピソードは、どの伝記でも必ず取り上げられている。彼はまた、数学研究者として歩み出すソフィアを支援し続けた人物でもある。だが、ヴァイエルシュトラス自身は登場しても、さすがにその家族についてまではほとんど書かれていない。『ソーニャ』では一箇所だけ、「ヴァイエルシュトラスの家族にも」(『ソーニャ』166)とあるのを見つけることができる。*Sparrow* では、夫の自殺によって精神的打撃を受けたソフィアを「三番目の妹として」迎え入れようとする申し出をした、というくだりがあることから、ヴァイエルシュトラスに妹が2人いることがかろうじてわかる。『生涯』ではもう少しましで、「次の部屋の円卓に、学者の二人のオールドミスの姉妹エリーザとクララが座っていた。彼女たちは同じように滑らかに調髪し、[中略]同じような黒いカシミロンの衣服を着ていた。ちょうど普仏戦争のときであった。姉妹はフランスで戦っている義勇兵のために、厚い靴下を熱心に編んでいた」(『生涯』104)と一段落分を費やしている。いずれにしても、伝記では全く取るに足らない扱いで、読み飛ばされてしまっても仕方のないこの姉妹の存在が、‘Too Much Happiness’の恩師宅訪問のシーンで前景化されていることは注目に値する。

実はこの、「夫のいない、中高年女性の姉妹」というのが、マンローの作品にはよく登場するのである。2作めの *Lives of Girls and Women* (1971) は、一貫してデル・ジョーダンという少女を語り手とする連作短篇集<sup>11</sup>なのだが、ここに出てくるエルスペースおばさんとグレースおばちゃんがその例の筆頭として挙げられるだろう。この二人はクレイグおじさん(といっても父の「おじ」)の未婚の妹たちで、地元の役人であり「名士」的存在である兄を支え、家庭を切り盛りしている。掃除、洗濯、料理、裁縫に編み物、畑仕事に乳搾りと、彼女たちが「守備範囲」だと心得ている仕事には余念がなく、噂話好きで快活かと思えば、語り手の母のような共同体の倫理感から外れがちな「主婦失格」の既婚女性には、反感を露わにする。*The View from Castle Rock* の‘The Ticket’に出てくる祖母とその妹の場合は未亡人で、エルスペースとグレースの場合よりもそれぞれの個性が差別化されて描かれている。もうひとつ例を挙げると、*A Love of a Good Woman* の‘My Mother’s Dream’で、ここに登場する語り手の伯母たちも、やはり未婚の姉妹である。

いずれの例でも、この姉妹たちは働き者で、家事労働に長けた人たちなのだが、それに対置されるのが「主婦に向いていない」、何らかの形で「母親として欠陥がある」とされる「母」である。誤解のないように付け加えておくが、あくまでもこの共同体の倫理観に照らして、である。‘My Mother’s Dream’の「母」は元バイオリニストで、赤ん坊である語り手をうまく世話することができず、片方の「伯母」が全部肩代わりしてしまう。‘The Ticket’での「母」は（マンローの実母同様に）神経系の病気を患い、家事はすべて娘である語り手が担っている。Lives of Girls and Women の「母」は家事をやらないわけではないが、百科事典の営業をしたり、新聞にせっせと投書したりといった「突飛なこと」をするために浮いた存在であり、家事が行き届いていないとして批判もされる。

ソフィア・コワレフスカヤの家はロシアの貴族であるから、「母」の存在が家事労働と結びつけられることはないが、ここでの問題は愛情の欠落である。前項で触れた通り、ソフィアの母親は姉アニュータと弟フォードルを可愛がり、ソフィアには冷淡だった。アニュータが生まれた後、跡継ぎである男子の誕生を熱望していた両親は、第二子がまた女の子だったことに落胆し、母親の日記にはソフィア誕生の記述さえなかったという。その他にも、幼い頃に親から可愛がってもらえなかったエピソードは伝記にはいくつも見出すことができ、胸が痛くなる思いがする。

‘Too Much Happiness’ではこうしたエピソードには触れられていない。3人称とはいえ視点は限りなくソフィアに寄り添った形で語られる形式なので、敢えて辛すぎる記憶を呼び起こすことはしないのだ。母との関係は、まず作品の最初のあたりで‘And certainly Sophia herself as her mother’s unsatisfactory child, displeasing as usual.’ (250) と一文ある他は、「Ⅲ」で‘Sophia had not been a favourite with her mother or her governess.’ (274)、およびヴァイエルシュトラスがソフィアの体調を心配してその母親に手紙を書いたところ、激動のパリを潜り抜けた娘たちを気遣うというよりは、姉娘が事実婚、妹娘が「白い結婚」と判明したことへの心的動揺を綴った返事が来たという説明 (277) の2か所に書かれているのみである。結婚についてのソフィアの回想には、家長としての父親は登場するが母親は一切出て来ない。この不自然なまでの「母不在」が、ソフィアと母親との関係を物語っている。

「Ⅲ」では当然のことながら、弟子としてヴァイエルシュトラスのもとへ通っていた頃のことも回想される。美味しい食事とデザートがふるまわれる日曜日の夕食の様子や、暖炉を囲んでの朗読会、ソフィアとその友人のために心をこめたクリスマスのお祝いをしてくれたことなどが思い出される。ロシアの実家での温かな記憶が描かれないことから、ソフィアがこの家に「疑似親」を見出していたことは想像に難くない。しかし、だからといって主人公がこのヴァイエルシュトラス家の老姉妹を手放しで賛美するわけでもないのである。

Sophia climbed the stairs thinking not of the professor but of these two women who had made him the centre of their lives. Knitting mufflers, mending the linen, making the puddings and preserves that could never be trusted to a servant. Honouring the Roman Catholic Church as their brother did -- a cold undiverting religion in Sophia's opinion --- and all without a moment of mutiny as far as you could see, or any flicker of dissatisfaction. And never, as far as Sophia could see, a flicker of dissatisfaction.

I would go mad, she thought. (278)

*Lives of Girls and Women* の‘Heirs of the Living Body’では、エルスペースとグレースは生き生きと描かれているものの、続く‘Princess Ida’では共同体の倫理観から外れた行いをすることが平気な「母」に対する羞恥心と、エルスペースとグレース二人組の批判から母を擁護したい気持ちとがないまぜになった、語り手の複雑な感情が描かれる。そして母に関する嫌味を言う二人に対し、‘One of my father's aunts – it never matters which – said, “Now she will miss her writing to the newspapers.”’<sup>12</sup> と冷淡になっている。‘My Mother's Dream’の不器用な母も、最後にはささやかな勝利を勝ち取る。‘The Ticket’の場合、病気の母は後景に退いているので軍配があがるということはないのだが、好意的に描かれてきたはずのチャーリーおばさん（祖母の妹）に対し、作品の最後で語り手は、‘I couldn't let a soul see into me, let alone a person as simple as Aunt Charlie.’<sup>13</sup> と言って、読者の度肝を抜くのである。‘Too Much Happiness’もこれと同様で、ソフィアの母の「地位向上」がなされることはないが、家庭的な心地よさにもたれかかって、それで彼女の心の穴が塞がれるわけではない。「疑似親」はあくまでも「疑似」でしかないのである。

そして、ソフィアは母親に愛されなかった娘であるだけではない。彼女が娘の養育を友人に任せきりにしていたのは伝記から読み取れるが、たまに一緒にいるときの様子を作品内ではたった3行に描き、自らもまた娘を可愛がってやれない母親であることを示唆している。

Fufu brought her jam on a plate, asked her to play a child's card game.

‘Leave me alone. Can't you leave me alone?’

Later she wiped the tears out of her eyes and begged the child's pardon. (251)

### <結婚と「ラプンツェル症候群」>

当時のロシアでは、未婚女性が親の承諾なしに外国へ行くことはできなかった。新しい思想や精神的な自由を求めていたアニュータやその友人たちは、国外へ連れ出しても



らうための偽装結婚相手を探していた。この計画にのってくれそうな人物を探し当てたが、彼は誰もが惹かれるアニュータには興味を示さず、たまたま居合わせた妹のソフィアが相手ならば承諾すると言った。妹が姉より先に結婚するのは一般的に望ましいことではなかったし、姉妹は6歳も年齢差があった。ソフィアは姉の願いを慮り、ウラジーミル・コワレフスキーと「偽装駆け落ち」をして親に結婚を承諾させるという実力行使に出たのだった。

カナダ文学論『サバイバル』の中で、マーガレット・アトウッドは「ラブントゥエル症候群」というカナダ女性主人公の特徴を挙げている。主人公は魔女によって塔に幽閉され、王子様がやってきて彼女を救い出すのがラブントゥエルの物語だが、それでめでたしめでたしにならないのが「症候群」なのである。つまり、王子様による救出は主人公にとって一時的な逃避に過ぎないのだという。<sup>14</sup>

マンローの場合、実人生がそうだったと言えるだろう。独特の倫理観に縛られた閉鎖的なウィンガムの町、貧しい家庭、パーキンソン病が進行していく母。大学で知り合ったジム・マンローは中流家庭の息子で、結婚してカナダ西海岸へと連れ去ってくれるまさに「王子様」だった。作家として歩み出す妻の応援もしてくれた夫だったが、後にこの結婚は破綻する。こうした経験が、例えば前項で触れた‘The Ticket’などの作品に反映している。‘The Ticket’では結婚前の一時期しか描かれていないが、‘I thought I loved him. [...] He deserved better than me, Michael did. He deserved a whole heart.’<sup>15</sup> (281) という微妙な言い方は、この結婚の先行きを暗示している。

したがって、自らの偽装結婚によって姉の国外脱出を手助けし、同時に自身の留学も果たしたソフィアの生き方に、マンローが多大な関心を寄せたのも頷ける。やがてソフィアは「白い結婚」から「本物の」結婚生活に入り、娘をもうけるが、その後5年足らずで夫は自殺してしまう。数学者として、また作家として着実に業績を積み上げ、パリの科学アカデミーからボルダン賞を授与されるという荣誉に輝く一方で、恋人マキシムとの関係は順風とは言い難い。ソフィアの葬儀におけるマキシムのスピーチは『生涯』に詳しいが、‘referring to Sophia rather as if she had been a professor of his acquaintance’ (303) と簡潔に述べられている‘Too Much Happiness’の方が、恋人の愛情にも満たされなかったソフィアという像を浮き彫りにする。

## タイトル

ジョイス・キャロル・オーツが‘a title both cuttingly ironic and passionately sincere’ と評している<sup>16</sup>タイトルであるが、‘Too Much Happiness’というのは、そもそもは *Sparrow* の第

24 章の見出しである。臨終の場面は、伝記によってそれぞれ食い違っている。『ソーニャ』では友人の「一人が着いたけれども、もう遅かった」(『ソーニャ』269)とあり、『生涯』では「テレサ・ギュルデンが駆けつけたとき、(中略)息をひきとった」(『生涯』308)、そして *Sparrow* ではそのテレサが‘remembered her last words as: “Too much happiness.”’ (*Sparrow* 313) としている。

マンローは *Sparrow* の記載をそのまま借用したのではない。‘Teresa thought she heard her say “Too much happiness.”’ (302; italics added) という一文は、それが時期的に最期だったかどうかは明らかにしていないし、テレサがその時そう聞いたと「思った」という恣意性を含ませている。確かに、社会的には華々しい成功をおさめたが、私生活では幸せとはいえなかったソフィアが‘Too much happiness’とつぶやいて死んでいったというのは、最強のアイロニーには違いない。だが、〈列車の旅〉の項で述べたデンマーク人の医師にしろ、このテレサにしろ、ヴァイエルシュトラスにしろ、ソフィアを気遣っているようでいながら、皆自分の都合の良いように解釈し発言しているという状況がマンローの創意によって生み出されているのだ(ソフィアの葬儀にヴァイエルシュトラスが月桂樹のリースを贈り、その後6年も生きたというのは事実だが、‘He had said to his sisters that he knew he would never see her again.’ (303) というのは創作である。この一文に呼応するように、ソフィアがヴァイエルシュトラス宅を辞去する時に、‘I will never see him again, she thought.’ (280) という一文が前もって仕込まれている)。こうした操作により、タイトルは多義的な解釈が可能になるのである。

## おわりに

以上見てきた通り、マンローはソフィア・コワレフスカヤの伝記に書かれた些細なエピソードも見逃さず、「長距離列車の旅」や「母親と疑似親」、あるいはアトウッドの言う「ラプンツェル症候群」などといった、自身が用いてきたモチーフやテーマに引き寄せ、自家薬籠中の物とした。またタイトルも伝記から借用したものではあるが、作品世界と呼応して多義性を帯びたものになっている。したがって‘Too Much Happiness’は、カナダとのつながりがないとか歴史上の人物を主人公にしたなどの点で今までの作品とは大きく異なるものの、そうした表面上の特徴の違いにも拘わらず、いかにもマンロー的な作品に仕上がっているのである。

自らの体験から作品を生み出してきた作家ではあるが、いわゆる「事実の記録」から物語を紡ぐのは *The View from Castle Rock* の第1部に収められた4作品(‘No Advantages’, ‘The View from Castle Rock’, ‘Illinois’, ‘The Wilds of Morris Township’) で試している。この

本の序文で述べているように、スコットランドに滞在し地元図書館で郷土史料を丹念に調べ、自身の先祖が書き残した手紙や回顧録といった「遺産」と読み合わせるという作業を経て、彼らがいかに海を渡り、カナダにたどりついて暮らしを築き上げていったかを作品化した。このときの仕事が、‘Too Much Happiness’に存分に活かされているように思う。

## 注

<sup>1</sup> この他、邦訳は以下のものがある。

<短篇集> *The Moons of Jupiter*: 横山和子訳『木星の月』(中央公論社、1997)、*Hateship, Friendship, Courtship, Loveship, Marriage* (2001): 小竹由美子訳『イラクサ』(新潮社、2006)、*The View from Castle Rock*: 小竹由美子訳『林檎の木の下で』(新潮社、2007)、*Too Much Happiness*: 小竹由美子訳『小説のように』(新潮社、2010)、*Dear Life*: 小竹由美子訳『ディア・ライフ』(新潮社、2013)

<短篇> ‘Boys and Girls’ (*Dance of the Happy Shades*, 1968): 川本静子訳「男の子と女の子」『英語圏女性作家の描く家族のかたち』(ミネルヴァ書房、2006)、『Miles City, Montana’ (*The Progress of Love*, 1986): 川本三郎訳「マイルズ・シティ、モンタナ」『AMERICAN WIVES 描かれた女性たち』(スイッチ・コーポレーション書籍出版部、1989)、『‘Save the Reaper’ (*The Love of a Good Woman*): 近藤三峰訳「セイヴ・ザ・リーパー」『アメリカ短編小説傑作選』(DHC、2001)、『‘Free Radical’ (*Too Much Happiness*): 神崎朗子訳「フリーラジカル」『ベスト・アメリカン・短編ミステリ』(DHC、2010)

<sup>2</sup> Alice Munro, ‘Too Much of Happiness,’ *Too Much of Happiness* (2009, Vintage), p. 305. 以下、本書からのページ数は本文中に記す。

<sup>3</sup> フランソワ・トリュフォー監督、『アデルの恋の物語』(1975)。

<sup>4</sup> ソフィア・コワレフスカヤの自伝(的小説) *Sisters of Raefskij* (1890) とそれに接続した形でのアン・シャーロット・レフラー(ミッタク・レフラーの妹)による伝記 *Sonya Kovalevskaya* (1892) の翻訳。野上弥生子は英語版から翻訳したのだが、その本を夫から与えられたものであること以外、英訳者も出版社も覚えていないと巻頭の「序」で述べている。1895年に T. Fisher Unwin から A. De Fuluhjelm と A. M. Clive Bayley の訳で出されたものが、おそらく野上の元本であると思われる。

<sup>5</sup> 原作は1959年出版。

<sup>6</sup> Lisa Dickler Awano, ‘An Interview with Alice Munro’

([www.vqronline.org/blog/2010/10/22/an-interview-with-alice-munro](http://www.vqronline.org/blog/2010/10/22/an-interview-with-alice-munro)), アクセス日: 2011年6月25日

<sup>7</sup> *Sparrow* ではそう説明されているが、『生涯』ではソフィアの方が墓地へとマキシムを誘ったとしている。『ソーニャ』においてはどちらの発案かは書かれていない。

<sup>8</sup> Alice Munro, ‘Foreword’, *The View from Castle Rock* (2006, Vintage), p. x.

<sup>9</sup> 19世紀前半に活躍したスコットランドの詩人・作家であるジェイムズ・ホッグ(1770-1835)もその一人。ホッグの母親がレイドロー(マンローの旧姓)家の出身で、マンローの「曾祖父の曾祖父」の姉にあたる。ホッグによる墓碑銘が作品中で提示されている。

<sup>10</sup> 作家の伝記的事実は Robert Thacker, *Alice Munro: Writing Her Lives* (2005, McClelland & Stewart) による。

<sup>11</sup> 副題に A Novel と添えられているせいで、この作品が長篇小説であるかのように紹介されているのを時々見かけることがある。

<sup>12</sup> Alice Munro, ‘Princess of Ida’, *Lives of Girls and Women* (1971, Vintage), p. 101. Italics added.

<sup>13</sup> Alice Munro, ‘The Ticket’, *The View from Castle Rock*, p. 283.

<sup>14</sup> マーガレット・アトウッド著、加藤裕佳子訳『サバイバル—現代カナダ文学入門—』（お茶の水書房、1995）、p. 273.

<sup>15</sup> ‘The Ticket’, p. 281.

<sup>16</sup> Joyce Carol Oates, ‘Too Much Happiness: The Stories of Alice Munro’, *In Rough Country: Essays and Reviews* (2010), p. 329.

## 参考文献

Kennedy, Don H. *Little Sparrow: A Portrait of Sophia Kovalevsky*. Athens, Ohio: Ohio University Press, 1983.

Munro, Alice. *Lives of Girls and Women: A Novel*. 1971; New York: Vintage, 2001.

-----, ‘The Spanish Lady’, *Something I’ve Been Meaning to Tell You*. 1974; New York: Vintage, 2004.

-----, ‘Bardon Bus’, *The Moons of Jupiter*: 1982; New York: Vintage, 2007.

-----, ‘The Albanian Virgin’ and ‘The Jack Randa Hotel’, *Open Secrets*. 1994; New York: Vintage, 1995.

-----, ‘Save the Reaper’ and ‘My Mother’s Dream’, *The Love of A Good Woman*. 1998; New York: Vintage, 2000.

-----, ‘Chance’, *Rumaway*. 2004; New York: Vintage, 2005.

-----, *The View from Castle Rock*. 2006; New York: Vintage, 2007.

-----, ‘Too Much Happiness’, *Too Much Happiness*. 2009; New York: Vintage, 2010.

-----, ‘To Reach Japan’, *Dear Life*. London: Chatto & Windus, 2012.

Oates, Joyce Carol. ‘Too Much Happiness: The Stories of Alice Munro’, *In Rough Country: Essays and Reviews* New York: HarperCollins, 2010.

Thacker, Robert. *Alice Munro: Writing Her Lives*. 2005; Toronto: McClelland & Stewart, 2011.

マーガレット・アトウッド著、加藤裕佳子訳『サバイバル—現代カナダ文学入門—』（お茶の水書房、1995）

ソフィア・コヴァレフスカヤ、アン・シャーロット・レフラー著、野上弥生子訳『ソーニャ・コヴァレフスカヤ：自伝と追想』（1933; 岩波書店、1978）

リュボフ・アンドレウナ・ワロンツォーフ著、三橋重男訳『コワレフスカヤの生涯』（1975; 東京図書、1985）

Awano, Lisa Dickler, ‘An Interview with Alice Munro’  
([www.vqronline.org/blog/2010/10/22/an-interview-with-alice-munro](http://www.vqronline.org/blog/2010/10/22/an-interview-with-alice-munro)).

## Weaving a Story from Facts and Records

-- on Alice Munro's 'Too Much Happiness'--

FUKUMA Megumi

'Too Much Happiness' is not at all a typical Alice Munro story: its setting is not a rural town in south-western Ontario or a Canadian city such as Toronto, Vancouver or Victoria. Its protagonist is the celebrated Russian mathematician Sophia Kovalevsky, who was appointed to be the first female professor in northern European countries, and was also known as a writer. In this paper I examine this long story comparing it to three biographies of Kovalevsky. I demonstrate how some trivial episodes or characters in these biographies play important roles in 'Too Much Happiness'. Those are elaborately processed by the author, and turned into the author's familiar motifs and themes. Its title, though it comes from one of the biographies, can be said to equivocally resonate with its content. So 'Too Much Happiness' is after all a typical Munro, even though the materials are different. She probably acquired this technique of weaving a story from facts and records while she worked on her previous book *The View of Castle Rock*, and applied it to this longest story of hers.